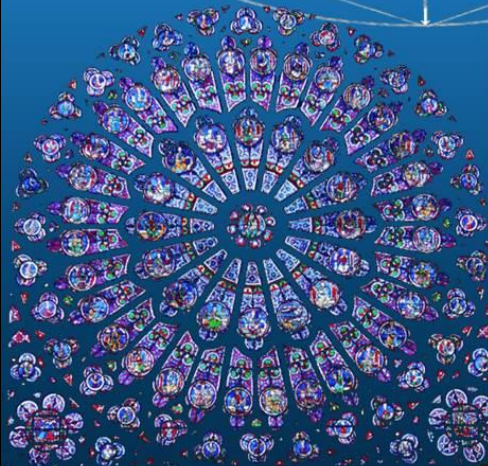


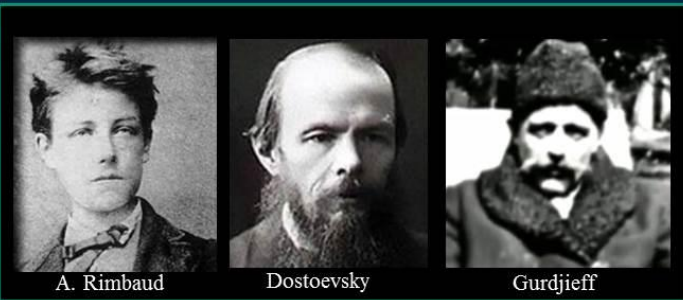


回帰への衝動、反逆の精神、アイアムと結び付いた知の系譜とエソテリシズムの源流

グルジェフ総論 グノーシス巡礼



THE GNOSTIC PATH: Gurdjieff and Other Pioneers on the Path of Renewal through Affirming, Denying and Reconciling
by Plavan N. Go



A. Rimbaud

Dostoevsky

Gurdjieff



著

「グノーシス」とは、「知ること」を指すギリシャ語で、本書においてそれは、人に決定的な変容をもたらすとこの知を意味する。

それは二つの知から成り立っている。第一の知は人を絶望に導き、第二の知はそこからの復活をもたらす。グルジェフに親しく接した者たちは、彼の存在、彼の教えが、この二重性を帯びていることを知っていた。このような知をもってみずからを変容させるといふのは、上から下に向かう退化性の流れに機械的に従うことを望まない反逆的な精神が個としての自覚をもって追求する道である。

本書では、グルジェフの死後に一般に知られるようになった「トマスによる福音書」をはじめとするグノーシス文献からうかがわれるキリスト教の特定の側面、およびランボー、ドストエフスキー、ニーチェといった人物の思想、洞察、生き方のなかにこの方向性を認め、それらとの関係でグルジェフを論じる。

グノーシスにおける第一の知を経て第二の知へと至る道は、グルジェフの「二つの河」のたとえにおいて、人がそのなかに生まれ落ちる上から下に向かう第一の流れから、それと並行して流れる下から上に向かう第二の流れに移ることに相当し、これは容易なものではなく、百万人がこれを試み、自分の責任において百万人が苦しむだろうとグルジェフは述べた。

それではなんでそんなことに向けて人を駆り立てるのかという質問に対し、グルジェフは、「なんの自覚なしにどこにもとどり着かない道を歩む人が味わう喜びや生理的な幸せ」と「自分が破滅の方向に向かって動いていることを知った人の味わう苦しみ」とを天秤にかけるとしたら、このうち後者を重んじざるをえないのは、それが百万人のうち一人でも、新しい人間が歩み出る可能性につながるゆえであり、その一人は百万人の味わった苦しみをあがなうだろうと告げた。

来たるべき人間の姿を予見し、その姿を追っての巡礼を呼びかける、アルチュール・ランボーの以下の詩が、『グノーシス巡礼』と題された本書のモチーフである。

泡立つ冬に、ざわめく夏に家を明け放った彼は、親しみだ。現在だ。飲み物と食べ物を清めた彼。移ろいゆく土地土地の魅力でもあり、尋常ならざる休息の甘美さでもある彼。われわれは憤怒と激情のなかにたたずみ、歓喜の旗がはためくなか、彼のものである親しみと未来、力と愛が、嵐の空を通り過ぎていくのを見る。

彼は愛、再発明された完璧な尺度、予見されたことのない驚くべき理性、永遠であり、しれが担った宿命的な性質ゆえに愛される機械である。彼がどれほどのものを許容し、われわれもまたどれほどのものを許容するかに、われわれはみな怖いほどに驚いたことがある。おお、われわれによる健康の享受、われわれによる新しい能力の追求、われわれが彼に寄せるエコイスティックな親しみと愛情。彼はその永遠の生命ゆえにわれわれを愛した。

われわれは彼をなつかしみ、彼は旅する。そして崇拜がやんだとき、彼の約束、約束の言葉が響き渡る。「こんな迷信、こんな古い肉体、こんな家族は、なくなってしまえ。この時代はもう終わったのだ」

彼はもうどこにも行かない。またもや天から降りてくるなんてことをしない。女らのかんしゃくや男らの陽気な騒ぎ、あれこれの罪をあがなったりしない。もうすべては成就されたからだ。彼が存在し、彼が愛されているということだけで。

おお、彼の息吹、彼の頭、彼の俊足。おそろべき速度をもって達成される姿勢と動作における完璧さ。

おお、精神の豊穡さと広大な宇宙への眺望！

その身体！ 解放の夢、刷新された暴力ををもってふるわれる慈愛の鞭！

その目、そのまなざし！ 彼の到来をもって終わりを告げる昔ながらの跪拝と苦役。

彼の日！ あらゆるうめきと身もたえが強い音楽の響きをもって打ち消される。

彼の歩み！ かつての異民族の侵入にまさる威力を帯びたその移動。

おお、彼、そしてわれわれ！ 無用の慈善より喜ばしいものである誇り。

おお世界！ 新たな災いが放つ澄み切った音！

彼はわれわれみなを知り、われわれみなを愛した。さあ、行こうではないか、この冬の夜、岬から岬へ、荒ぶる極地から城へ、雑踏から海浜へ、まなざしを交わしあい、疲れ果て、気持ちが萎えても、彼にあいさつを送り、彼を見ることを忘れず、彼が帰っていくのを見送り、波に身を洗われつつも、雪の広野の頂に立ちつつも、彼のまなざし、彼の息吹、彼の身体、彼の日を追って。